

氏名	周 歴 (シユウ レキ)		
学位	博士 (中国言語文化学)		
学位記番号	甲第175号		
学位授与年月日	2023年3月23日		
審査研究科	外国語学研究科		
論文題目	宋版《廣韻》と宋版《玉篇》の音韻研究		
論文審査委員	(主査) 大東文化大学教授	丁	鋒
	(副査) 大東文化大学教授	大島	吉郎
	(副査) 大東文化大学教授	佐竹	保子
	(副査) 文教大学教授	蒋	垂東

## 博士論文 審査報告

### 1. 本人履歴、研究の経緯および研究業績

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされております。ご了承ください。

### 2. 研究方法、論文の構成と内容

本論文は主に比較法、統計法、考証法、挙例法、分析法、データベース処理など研究方法

で考察を進めている。

本論文（本文 206 頁、参考文献と付録 39 頁、全 244 頁）は次の章立てから構成されている。

## 序 論

### 0.1 問題意識

### 0.2 先行研究の紹介

#### 0.2.1 《切韻》類韻書

#### 0.2.2 《玉篇》類字書

### 0.3 研究方法の特徴

### 0.4 当該研究の位置づけ

### 0.5 本論文の構成

## 本 論

### 第一章 《廣韻》と《玉篇》の版本比較研究

#### 1.1 宋版《廣韻》と澤存堂本《廣韻》の版本比較

##### 1.1.1 所収字の差異と分析

- (1) 澤存堂本《廣韻》多収字
- (2) 澤存堂本《廣韻》少収字
- (3) 澤存堂本《廣韻》訂正字

##### 1.1.2 同収字反切の差異と分析

- (1) 澤存堂本《廣韻》多収反切
- (2) 澤存堂本《廣韻》訂正反切

##### 1.1.3 同収字積義の差異と分析

- (1) 澤存堂本《廣韻》多収積義
- (2) 澤存堂本《廣韻》少収積義
- (3) 澤存堂本《廣韻》訂正積義

##### 1.1.4 両版本の優劣と本論文の版本使用

#### 1.2 宋版《玉篇》と澤存堂本《玉篇》の版本比較

##### 1.2.1 所収字の差異と分析

- (1) 澤存堂本《玉篇》多収字
- (2) 澤存堂本《玉篇》少収字
- (3) 澤存堂本《玉篇》訂正字

##### 1.2.2 同収字反切の差異と分析

- (1) 澤存堂本《玉篇》多収反切
- (2) 澤存堂本《玉篇》少収反切
- (3) 澤存堂本《玉篇》訂正反切

##### 1.2.3 同収字積義の差異と分析

- (1) 澤存堂本《玉篇》多収積義

- (2) 澤存堂本《玉篇》少収釈義
- (3) 澤存堂本《玉篇》訂正釈義
- 1.2.4 両版本の優劣と本論文の版本使用
- 1.3 まとめ
- 第二章 宋版《廣韻》と宋版《玉篇》同収字の同音研究
- 2.1 宋版《廣韻》と宋版《玉篇》所収字比較
- 2.1.1 両書の同収字
- 2.1.2 宋版《廣韻》単収字
- 2.1.3 宋版《玉篇》単収字
- 2.2 宋版《廣韻》と宋版《玉篇》同収単音字の音注比較
- 2.2.1 両書同反切の同音字
  - (1) 両書同反切の同音字と《玉篇殘卷》
  - (2) 三書同反切の同音字と《王韻》
  - (3) 三書同反切の同音字と《篆隸萬象名義》
  - (4) 両書同反切の同音字と《王韻》
- 2.2.2 両書異反切の同音字
  - (1) 反切上字相違の同音字
  - (2) 反切下字相違の同音字
  - (3) 反切上字下字共に相違する同音字
- 2.3 宋版《廣韻》と宋版《玉篇》の反切考論
- 2.4 まとめ
- 第三章 宋版《廣韻》と宋版《玉篇》の同収字異音研究
- 3.1 声母の特徴
- 3.1.1 類隔切と音和切
- 3.1.2 精莊二系の混切
- 3.1.3 娘母、日母、泥母の混切
- 3.1.4 匣母、云母、以母の混切
- 3.1.5 從母と邪母の混切
- 3.1.6 船母と常母の混切
- 3.1.7 濁音清化
- 3.1.8 有気音と無気音の混切
- 3.1.9 牙音と喉音の相違
- 3.2 韻母の特徴
- 3.2.1 介音の相違
  - (1) 開口と合口の相違
  - (2) 洪音と細音の相違
  - (3) 重紐の相違
- 3.2.2 母音の相違

(1) 重韻の相違

(2) 一等と二等の相違

(3) 三等と四等の相違

### 3.2.3 介音と母音の総合混切

(1) 開口と合口の相違

(2) 洪音と細音の相違

(3) 開合口と洪細音の総合混切

## 3.3 声調の特徴

### 3.3.1 平声

### 3.3.2 上声

### 3.3.3 去声

### 3.3.4 入声

## 3.4 まとめ

## 第四章 《玉篇殘卷》と故宮本《王韻》の音韻研究

### 4.1 《玉篇殘卷》と故宮本《王韻》の所収字状況

### 4.2 《玉篇殘卷》と故宮本《王韻》同収字の音注研究

#### 4.2.1 両書同音字の音注

(1) 同反切の同音字

(2) 異反切の同音字

#### 4.2.2 両書異音字の音注

(1) 声母の特徴

### 1. 中古の音声変化に属する音韻現象

1) 濁音清化

2) 類隔切と音和切

3) 《玉篇殘卷》知組字と《王韻》端組字

4) 《玉篇殘卷》莊組字と《王韻》精組字

5) 知組と章組の相違

6) 娘母、日母、泥母の相違

7) 匣母、云母、以母の相違

### 2. その他中古時代の音韻現象

1) 有気音と無気音の相違

2) 從邪と船常の相違

3) 牙音と喉音の両立

(2) 韻母の特徴

### 1. 介音の相違

1) 洪音と細音の相違

2) 開口と合口の相違

3) 重紐現象

## 2.主元音の相違

- 1) 重韻現象
- 2) 一等と二等の相違
- 3) 三等と四等の相違

## 3.介音と主元音の両方の相違

- 1) 洪音と細音の相違
- 2) 開口と合口的相違
- 3) 開合口と洪細音の総合混切

## 4.韻尾混切

### (3) 声調の特徴

- 1.平声
- 2.上声
- 3.去声
- 4.入声

## 4.3 故宮本《玉韻》と《玉篇殘卷》の反切考論

## 4.4 まとめ

## 終論

## 5.1 本論文の研究成果

### 5.1.1 《廣韻》と《玉篇》の版本研究

### 5.1.2 宋版《廣韻》と宋版《玉篇》の所収字研究

### 5.1.3 宋版《廣韻》と宋版《玉篇》の音韻研究

### 5.1.4 《玉篇殘卷》と故宮本《玉韻》の音韻研究

## 5.2 今後の課題

## 参考文献

## 既発表論文と各章関係

## 附録一 宋版《廣韻》と宋版《玉篇》の同収字表

## 附録二 宋版《廣韻》と宋版《玉篇》の同反切字表

本論文は序論、本論（全四章）、終論の三部分から構成している。序論は問題意識、先行研究の紹介、研究方法の特徴、当該研究の位置づけを詳述し、章節配置と内容構成を紹介した。

本論の「第一章《廣韻》と《玉篇》の版本比較研究」は、宋版《廣韻》と澤存堂版《廣韻》や宋版《玉篇》と澤存堂版《玉篇》の版本比較考察を配置し、同収字、同収字反切、同収字釈義に分けて、その差異を指摘し、分析を行った。また多収、少収、訂正の三方面から細部の差異を指摘し、宋版《廣韻》と宋版《玉篇》の歴史価値を実証した。「第二章 宋版《廣韻》と宋版《玉篇》同収字の同音研究」は宋版《廣韻》（所収字 25384 個）と宋版《玉篇》（所収字 22806 個）にある両書同収単音字（一字一音）12278 個のうち、同反切の同音字（2251 個）と異反切の同音字（7673 個）が全体の 80.8% を占める調査結果を示し、「両

書の音韻分布状況はよく似ている」との結論に至った。「第三章 宋版《廣韻》と宋版《玉篇》の同収字異音研究」は 2354 個の同収異音字に音韻分析を行い、声母・韻母・声調の角度から差異を究明した。両書の同収字異音は《廣韻》《玉篇》音韻層の差異を反映し、本論文の独創的な研究成果となる。「第四章 《玉篇残卷》と故宮本《王韻》の音韻研究」は梁代顧野王《玉篇》の残卷に記された 2071 字の反切に対して、王仁昫《刊謬補缺切韻》を利用して音韻比較を行い、同異関係を解明した。

終論は本論文の研究成果を整理し、今後の研究課題を示した。

### 3. 研究の成果および評価

本論文の主な研究成果は以下の三点にある。

(1) 宋版《廣韻》と宋版《玉篇》音韻比較の研究成果。《廣韻》と《玉篇》は共に宋代まで所収字最も多い字典と言えるが、本論文が初めて膨大なデータベースを構成した上、比較作業を進め、信憑性のある結果を提示した。音韻学分野の最新研究成果として評価出来る。

(2) 《玉篇》類字書音韻層解明の研究成果。《玉篇》は字書であり、音注層の構成は複雑多元である。本論文は文献学の分析手法を運用して、《切韻》《廣韻》音系と比較した上、顧野王初代《玉篇》から踏襲した約 470 年前の梁代音注も解明した。《玉篇》類字書の音韻状況は更に正確・精密に解明できた点が学術価値を有する。

(3) 「篇韻」比較研究の研究成果。中国の南北朝時代から清代まで千五百年の間、各王朝は権威をかけ独自の字書と韻書を編纂し、「篇韻学」という特殊な字書史専門領域の形成に繋がった。本論文は梁隋唐宋時代の「篇韻」数種類に対して横断的な学術研究を行い、篇韻学に貢献した。

本研究における課題設定の明確性、研究方法の妥当性、論述の適切性、成果の専門性などが博士論文の基準に達していると認められる。

### 4. 結論

以上の審査内容、評価に基づき、本論文を審査対象とする学位論文審査委員会は、全員一致をもって、本論文は博士（中国言語文化学）の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する。

以上